

『オルドス民話収集』(8)

－銭世英著、1999 年、フフホト－

訳 児玉香菜子

1. テキストについて

本テキストはペンネーム銭世英、モンゴル語名ジャガスが収集整理した『オルドス民話収集』(内蒙古人民出版社、1999 年)¹に収められている民話 86 話のうち、「神話物語」24 話から 3 話を訳出したものである²。訳出した民話それぞれの末尾に原題と原書の頁番号および口述者の氏名、採集整理年を記した。これらの主要な採録地は著者の出身地であるオルドス地域ウーシン(烏審)旗³であろう(児玉訳 2016:121)。

2. 民話 3 話の内容と特徴

第 1 話「愚直な次男の奇遇」は独り身の次男が性悪な兄と兄嫁から小さな竜を守り、その小さな竜の助けで天宮に行く。表題にあるように次男は「愚直」、もっと言うと、間の抜けた性格が特徴である⁵。愚直な次男は小さな竜の助言にしたがって、竜王の娘である三公女のスカーフを隠し、帰れなくなった三公女と結ばれる。3 年後に隠していたスカーフを三公女に渡してしまい、いなくなってしまった三公女を小さな竜の助けを借りて探しに行く。竜王からのさまざまな困難を三公女の手助けによって乗り越えた後、正式に三公女との婚姻が認められ、天宮で役人となり、竜王となる話である。類話にアントワヌ・モスタールト師により収集公開されている『オルドス口碑集』の「牡鹿」がある(モスタールト 1966:114-124)。モスタールト師によるとこの類話はあきらかに中国の説話であるという(モスタールト 1966:123)。違いは類話では兄嫁からのいびりがことさらに強調されているが、本話では虐げられているのは兄と兄嫁からである。次に、次男を助けるのが類話では牡鹿であること

¹ 原著名は『鄂尔多斯民间采风』。编者については児玉訳(2016:121)を参照のこと。

² 同著書にはほかに「動植物の民話」が 28 話と「人物の民話」が 34 話ある。「動植物の民話」と「人物の民話」はすべて、「神話物語」は 5 話をすでに訳出している(児玉訳 2016; 2018; 2019; 2020; 2021; 2022; 2023)。

³ 旗は内モンゴル自治区での行政区の名で、中国の行政単位 of 県(县)に相当する。

⁴ ウーシン旗については児玉訳(2016:121-123)を参照のこと。

⁵ 表題の原題は「憨老二の奇遇」で「憨」には聡明でない、愚かな、という意味と素直であるという意味がある。

である。最後に、類話では主人公は天上の妻との連絡が絶たれて、地上の妃たちとめでたく栄えたとなっている点である（モスタールト 1966：123-124）。話の展開をみると、「浦島太郎」に通じる助けた生き物の恩返し、天宮に戻るための娘のスカーフを隠して娘をめとる「天人女房」、逃げる際に呪具を後ろになげることで追撃者をふりきる逃走譚の「三枚の御札」と重なる。「三枚の御札」で追いかけてくるのは山姥であるが、ここでは宝物を奪われた寺の和尚たちである。

第2話「長と短の物語」は善良な長が全財産を積んで新しい土地を目指して旅に出たときに、乞食をしている性悪な短と出会う。長短は義兄弟の契りを結ぶものの、長は短に騙されて崖から突き落とされてしまう。長は一命をとりとめたものの、盲目となる。長はその後仙人と思われる人物の導きにより寺院で動物たちの会話を盗み聞きし、それをもとに裕福な牧畜民の娘の病気を治して婿となり、聖水で盲目を治し、家の近くに水源を発見し、幸せを手に入れる。他方で、短は手に入れた長の財産をあっという間に食いつぶし、また乞食に戻る。その後、長の成功を知って、長と同じようにしようとするが、逆に動物たちに食い殺されてしまうという話である。類話にドゥンガン⁶の民話「二人兄弟」（ボリス・リフチン 2021：83-86）やプミ族⁷の民話「けものたちのないしょ話」（君島編訳 2001：38-44）がある。動物たちの話を盗み聞きすること、その後の登場人物の対比的な成功と失敗はほぼ同じである。違いは本話では牧畜民の生活がベースとなっている点である。掘り当てた井戸の水の主要な用途は家畜の飲み水であり、金銀財宝を得ることは無いが、遠くにまで家畜に水を飲ませに行く必要がなくなったために、オオカミなどに家畜が襲われなくなり、家畜が増えることが豊かだとされている。また、仙人による導き、主人公が盲目になることとその回復のストーリーが類話では欠如している。

第3話「ハーン王の贈り物」ではハーン王の3人の夫人の中でもっとも寵愛を受けている妊娠中の第3夫人が、ハーンが遠征に出ている間に、出産した息子の赤ちゃんを第1、2夫人に子イヌとすり替えられて殺されてしまう。ハーン王は遠征から戻ってくると生まれ変わって言葉を話す子ウシの息子と再会し、困難な条件を乗り越えて息子をもとの姿に戻す。話の展開では「花咲か爺さん」に通じるものがある。

⁶ ドゥンガンは中央ユーラシアのキルギジア、カザフスタン、ウズベキスタンに居住する少数民族で、その人口は全体で10万人ほどで、イスラム教徒である。1800年代後半の中国のイスラム教徒の叛乱を機に、郷里である中国北西部の甘粛省、陝西省を追われ、中央アジアへの移住を余儀なくされた人びとである（荻原 2021：3；ボリス・リフチン 2021：5-9, 16）。

⁷ プミ族は中国の少数民族で、雲南省の西北の山地に住み、人口は約3万人。もとは青海、甘粛、四川の3省が接する辺境の、高山寒冷地にいた遊牧民が南下し、13世紀以降、現在の地に定着したとされる（君島編訳 2001：267）。

この3話に通じるのは勸善懲惡、善い行いをする人は報われ、悪者は懲らしめられるというものである。また、第1話では間抜けな主人公を助ける力強くかつ賢い竜王の三公女が印象的である。これはモンゴルにおける女性の社会的地位の高さを示すとともに（楊 2024）、英雄叙事詩における女性の剛勇さに通じるものである（荻原 2005）⁸。第3話はもちろんのこと、第1話は大きさのたとえにヒツジやウシが出てくる点で、第2話でも牧畜民の生活がベースとなっている点で、少なくとも語り手とともに、聞き手もモンゴル牧畜民であると言えるであろう。

3. 神話物語の民話

（1）愚直な次男の奇遇

むかしむかし、高原に2人の兄弟が住んでおり、長男は悪賢く、次男はまじめで愚直だった。彼らは幼い時に母を亡くしたため、父が父親にも母親にもなって、息子2人を苦勞して育てるとともに、儉約して長男に嫁をもらった。

長男は結婚して一人前になると、いつも父を面倒に思い、また次男が愚直すぎるのを嫌い、自分の嫁こそが自分の愛しい宝物だと考えていた。これらすべてについて、父は口にはしないものの、心の中ではとっくに分かっていた。

ある日、父親は2人の息子をそばに呼び寄せ、次男を連れて南山に戻って暮し、長男夫婦は家産を守って幸せに暮らすように告げた。

長男は聞くと大変喜び、続けざまに言った。

「父さん、安心して行ってください。父さんが次男を連れていくというのは正しいです。年老いた人にはそばで身の回りの世話をする人が必要です」⁹

長男の嫁は隣で聞いてうれしい反面、慌てた。うれしいのは舅を追い出さなくても自分から出ていくことで、慌てたのは次男が出ていってしまうと、家で労働をする人がいなくなることである。それでこっそりと長男に向かって言った。

「次男は愚かものであるが、力仕事はよくこなします。次男が本当に行ってしまったら、誰がわたしたちに水を運び、薪を運んでくれるのかい？」

長男はその通りだと考えた。父親は仕方なく、ただ1人南山に帰るほかなかった。

父親が行った後は、長男夫婦は次男を作男にして働かせ、毎日イヌを打ち、ブタに食べさせるように、水を運ばせ、薪を運ばせ、あるときは仕事が終わらないうちに、他の仕事を言いつけた。このよ

⁸ すでに訳出した「ハーンによる息子の嫁選び」は愚かな息子のためにハーンが賢く聡明な女性を探し求める内容である（児玉訳 2022：350, 364-369）。

⁹ 原文では会話により改行の有無にばらつきがある。本稿では会話文の場合はすべて改行に統一した。

うにしても、兄も兄嫁もまだ満足せず、しきりに次男を「愚か者」、「うだつが上がらないやつ」と罵った。

ある日、次男は山に柴を刈りに行ったその帰り道に、傷を負った小さな竜に帰り道をふさがれた。「わたしを助けてください。おまえさんの兄がわたしを追っています。もしわたしが彼の手に落ちたら、わたしの命はありません」

次男は小さな竜の傷が軽くないのを見て、とてもかわいそうに思い、尋ねた。

「どのようにして助けたらよいですか？」

小さい竜は言った。

「おまえさんが縛っている薪の中にわたしを入れて背負い、何もなかったかのようにそのまま道を進んでくれればよいです。もし、おまえさんの兄さんが追いかけてきて小さい竜を見なかったかと聞いてきたら、見ていない、と答えてください」

次男は小さな竜の願いに従って、急いで柴を縛っているのを解くと、小さな竜を柴の中に入れて縛り、また背負い歩き出した。数歩前に進んだところで、長男がぜいぜい息を切らし、荒い息を吐きながら追い付いてきた。

「おい、次男、傷を負った小さな竜がここを走って行ったのを見なかったか？」

「見てない」

「ありゃりゃ、おかしいぞ！明らかにここを走って行ったはずだ。どうしてあっという間に見えなくなったのだ？おまえは俺さまをだましているのか？」

長男はここまで言うと、突然口調を変えて、すかしなだめるように言った。

「素晴らしいわたしの兄弟よ。見たのなら見たと言いなさいよ。分かっているかい。竜の皮はとても値打ちがあるのだよ。もしその小さい竜を捕まえることができれば、俺たち兄弟とおまえさんの兄嫁3人は尽きない栄耀栄華を極める富を享受できるのだ。早く言いなさい。あの小さな竜はいったいどこに行ったのだい？」

「わたしは本当に何も見ていません」

次男は言い終わると、うつむいて早足で前に歩き出した。

次男は薪を背負って家に着くとすぐに、縄を解く間もなく、長男が弓矢を背負って戻ってきた。長男は帰ってくるとすぐに兄嫁に向かって言った。

「今日、おれが山で猟をしているときに、一匹の小さな竜を見つけた。おれが矢を放つと、竜の体に命中したんだ。だが、少しみじろぐと逃げてしまった。慌てて追いかけて、次男の前まで追いつくと影も形も見えなくなってしまった。次男に見たかと聞くと、次男は見えないと言う。あーあ、もしあの小さい竜を捕まえることができれば、本当にたくさんの銀貨と交換できて、おれたちが一生使うに足るだろうよ。おまえさん、惜しいかい、惜しくないかい」

兄嫁は聞くと大変嘆き惜しみ、手にしていたほうきを次男の頭に向かって振り上げて、3回思い切りたたいてから罵って言った。

「おまえ、このおつむの足りないばかりが！力仕事をして道を歩くとき、周りを見ることも分からないのかい？一生涯大物になれない愚か者だよ。とっとと死んでしまえばいいのに！」

罵り終わると、兄嫁は薪が積んであるところに来て薪を拾った。次男が背負って戻ってきた薪を見ると、縄をまだほどいてないので、ついでに薪をしばっている縄を引っ張って家に戻り地面において、火をおこし食事を準備しようとした。思いがけず縄がほどけて、小さな竜が地面に現れた。長男は一目見ると大喜びし、飛び上がって叫んだ。

「早く捕まえろ、早く捕まえろ。これこそがおれが言ったあの小さな竜だ」

その途端に、次男はすばやく前に躍り出て小さな竜を懷の中に抱きかかえ、

「兄さん、義姉さん、このかわいそうな小さな竜を見逃してください。こいつはもうすでにこのようです。どうかまた傷つけるようなことはやめてください」

と言い終わると、小さな竜を抱きかかえてすぐに自分のぼろぼろの小屋に入っていった。

これ以降、次男はどこに行くにも、小さな竜をそばに置いていた。竜にご飯をやり、水をやり、薬草をとってきて傷を治した。徐々に、小さな竜の傷はよくなっていった。

月日は一日、一日と過ぎていった。ある日、兄弟の父親は言付けをして、還暦のお祝いをするので、2人の息子と嫁にお祝いの菓子を食べにくるよう招待した。

長男夫婦は聞くとすぐにとても喜んだ。だが、この2人が喜んだのは父の長寿祝いではなかった。小さな竜を奪う機会がやってきたことだった。長男夫婦はずっと必死にその小さな竜を何日も見ていたが、手出しできなかった。兄と兄嫁に対してずっと何でも言いなりの次男が今はがらりと態度を変えて、小さな竜を必死に守り、彼らに手出しさせなかったからだった。

当日、長男夫婦は突然「病」になった。オンドル¹⁰に横たわってうんうん、あーあーと次男を呼び寄せて言った。

「わたしたちの父さんは60歳の還暦の日を迎えました。本来、わたしたち3人の子どもたちが全員父の長寿祝いに行かなくてならない。であるが、あいにくおまえさんの兄と兄嫁は急病になってしまい、おまえさんに任せるほかない。わたしたち2人を代表してしっかりお祝いしてきてくれ」

次男は前からずっと父を恋しく思っていたので、自分をお祝いに行かすと聞いて当然うれしかった。

次男が小さな竜を連れて出発しようとしたとき、兄に大声で呼び止められた。

「次男よ、もし一人で行くのなら、小さな竜を連れて行くと、父をひどく驚かしてしまうよ」

¹⁰ 中国語で「炕」。暖房設備。床下に煉瓦などを仕切った煙道を設け、焚口から煙を送り込んで部屋を暖める。

「小さな竜を置いていくと、兄さんたちが小さな竜を傷つけるのを心配しています」

「ああ、何言ってるんだい。おまえがこんなに長い間育てているんだ。おれたちがどうして残酷にもそいつを傷つけることができるかい」

次男は兄の話を信じて、小さな竜を小さな家の中に閉じ込めて、安心して出かけた。

実家に着くと、父にお祝いのあいさつをして、茶碗をもち、祝いの菓子（あげもち）をちょうど食べようとしたときだった。次男は突然心臓がどきどきし、まぶたがびくびくし、いてもたってもいられなくなった。ああ、わたしの兄と兄嫁はわたしの小さな竜をまた殺そうとしてないだろうか。そう思うと、次男は慌てて茶碗をおいて、走って戻った。

戻ってみると、兄と兄嫁が次男の小さな小屋の窓によじ登り、弓矢をかまえて、ちょうど中に射ようとしていた。次男は飛び出して、まさに射ようとしている弓矢をつかんで言った。

「ああ、兄さんと兄嫁はなんて残忍なんだ。今日はわたしの足が速かったおかげだ。そうでなかったら、かわいそうな小さな竜はおまえさんたちに殺されていただろうよ！」

次男は一切を顧みず、兄と兄嫁を押しつけ、また小さな竜の命を救った。

その日の晩、小さな竜は突然口を開いて話した。

「ああ、善人よ、わたしは天宮に戻ることにしました。おまえさんは人間界にとどまって牛馬にも及ばないこのような生活を続けたいですか。それとも、わたしと天宮に行き新しい生活を求めたいですか？」

「えっ！天宮にわたしが行くことができますか？そのうえ行ったとして、わたしみたいな平凡な人間がどのように生活していくことができますか？」

「その点は心配する必要はありません。もしおまえさんが天宮に行ったら、よい暮らしができるだけでなく、役人になれるかもしれません」

「わたしをからかわないでください。わたしは自分の毎日の2、3杯のごはんにありつく方法すらわからない愚か者です。どうやって役人になることができるのでしょうか」

「これについて、おまえさんは気にする必要はありません。わたしにいい方法があります」

と小さな竜は言った。

「おまえさんはわたしの命を救ってくれた恩人です。3回も何も顧みず、わたしを救ってくれました。わたしは必ず恩返しします。わたしと一緒に行きましょう！」

次男があれこれ考えるのを待たず、小さな竜はまた催促した。

「あまり時間がありません。わたしの背中の上にまたがって、目を固くつぶって、耳をよくふさいで、話をしてはいけません」

次男は大人しく従うしかなく、小さな竜の背中にまたがり、耳をふさぎ、目を閉じるとすぐ、突然天地を揺り動かすような大きな音がすると、何も分からなくなった。

どれだけの時間が過ぎたのか分からないが、小さな竜が軽く愚直な次男をたたき、
「善人よ、早く目をあけてみなさい」と言った。

次男が目をあけてみると、ようやく自分と竜がすでに美しい仙界の山に到着していることを知った。
上を見上げると、青空に真っ赤な太陽が高くのぼり、下を見ると、白い雲が広がり、神秘的な霧がたちこめていた。ぼんやり見ていると、小さな竜がまた口を開いた。

「わたしはあなたをここに残していきます。今後おまえさんが何か困難にであっても、わたしを2回呼びさえすれば、すぐにやってきます」

「おまえさんがわたしをここに残していったって、わたし一人でどうやって生活するのですか」

次男は慌てて言った。

「慌てないで、わたしの言うことを聞いてください。ここは分岐点です。ここに少し座ってから立ち上がって南西方向に行くと、遠くないところに小さな道がもう一つ見えます。その小さな道を行くと、緑色の湖が見えます。おまえさんはその深緑色の湖のそばのどこかに座りなさい。しばらく待つと、東の方から緑色のうすぎぬのスカーフをかぶった大変美しい娘がやってきます。彼女はあなたの未来のお嫁さんです。彼女がやってくるのが見えたら、おまえさんは相手にしないでください。もし彼女が、おまえさんが何者か尋ねても、おまえさんは答えなさい。彼女は恥ずかしそうにおまえさんに微笑んで湖畔に向かって歩いていきます。彼女は歩きながら、頭にかぶっている緑色のうすぎぬのスカーフをとって大きな石の上に置き、湖畔に着くと、顔を洗い身支度します。彼女が一心に髪を結び、顔を洗っているときに、おまえさんはこっそりとその大きな石のそばに近づいて、彼女の緑色のうすぎぬのスカーフを盗み、石の下に置いてしっかり隠したら、何があっても彼女に返してはいけません」

これらを言い終わると、小さな竜はいとまを告げた。

小さな竜が去ったあとまもなく、次男は小さな竜の言いつけに従って南西の方へ少し行くと、小さな道を見つけ、小さな道にそってしばらく行くと、輝くばかりの深緑色の湖が見えた。湖のそばに少し座っていると、やはり東の方角から緑色のうすぎぬのスカーフをかぶった美しい娘がやってきた。娘はやってくると、道端にハンサムな若者が座ってるのを見て、思わず心が動き、こらえきれずに尋ねた。

「あなたは何者ですか？なぜ一人でさびしくここに座っているのですか」

次男は無言だった。

「おまえさんはどこから来て、どこに行くのですか？」

娘はまた聞いた。

次男はやはり一言も言わず、顔には孤独で悲しみの表情を浮かべていた。娘は若者が一言も言わず、満面の悲しみを浮かべているのを見て、とても同情した。彼女ははにかみながら彼に向って笑い、湖

畔に向かって真っすぐ歩いて行った。彼女は歩きながら、頭にある緑色のうすぎぬのスカーフをとって大きな石の上に置き、そのあと湖畔に着くと、手で水をすくって顔を洗い、髪をとかしだした。このとき、次男はこっそりとその大きな石のそばに行って、彼女の緑色のうすぎぬのスカーフを盗み、石の下に置いて隠し、元の場所に戻った。

娘は身支度を終えて見ると、スカーフが無くなっており、次男の方に来て、見たかと尋ねた。次男は見えないと言った。娘はそれを聞くと気をもんでしきりに地面を踏みならした。

「おや、今さっき置いたのです。なぜちょっとの間に見なくなってしまったのか？きっとおまえさんが持っていったに違いない。早くわたしに返してください。分かってください。スカーフが無ければ、わたしは家にも帰れないのです」

「わたしは持って行っていません。本当に持って行っていません。あなたがスカーフをどこに置いたのかさえ見ていません」

「それならどうしたらいいのでしょうか。わたしは家にすら帰れないのですよ」

「帰れないのなら帰らないで。わたしと一緒にしてください」

「もしおまえさんが本心からわたしを好きなら、わたしも喜んでここにとどまってあなたと夫婦になりましょう」

次男は聞くと大喜びし、すぐに、2人は湖畔で天地を拝み、結婚した。青空の下、婚礼の日に新郎新婦が部屋に入りオンドルに座って互いに礼を交わすように、礼を交わし、湖畔での野宿を新婚夫婦の寝室とした。

翌朝、目が覚めると、奇跡が起きていた。ふと見ると、あたり一面が農作物と果物で、さらに青色のレンガ造りの家、庭とそれを囲む垣根があった。家の中に入ると、中には必要なものは何でもあるが、誰も住んでいなかった。次男は不思議に思い、

「おお、昨晚わたしたちが寝るときには、ここには何もなかった。なぜ目が覚めると、何でもあるように変わったのだろうか？この五穀、農作物と果物、野菜は誰が植えたのですか？この青いレンガ造りの家は誰が建てたのですか？」

「誰が植えたか、誰が建てたのか、かまうものですか。いずれにしてもわたしたち2人の果報です」と美しい花嫁は口をすぼめて笑った。

その後、次男とその妻は美しい自分の家で仲睦まじく、とても幸せな生活を過ごした。またたく間に3年が過ぎた。家では食べるものも着るものの心配もなく、さらに丸々とした子どももできていた。次男はうれしくて一日中ずっと口もとが緩みっぱなしで、小さな竜が言いつけた話をすっかり忘れてしまっていた。

ある日、昼食を食べ終わり、木陰に座り涼んでいると、妻が突然尋ねた。

「ねえ、3年前にわたしたちが出会ったとき、わたしが失くしたあの緑色のうすぎぬのスカーフをお

まえさんは結局見たのですか、見てないのですか」

「ああ、見たことあるよ、見たことあるよ」

と次男は口から出まかせに言った。

「もし、あのうすぎぬのスカーフを本当はあなたに隠されたのだとしたら、今持ってきてわたしに一目見せてくれないかしら」

「なぜだめなんだい？」

と次男は言いながら、湖畔に駆けつけて、あの大きな石を探し出し、石の下からその緑色のうすぎぬのスカーフを取り出した。広げてみると、なんと3年以上もずっと押さえつけられていたにもかかわらず、少しも色が変わっておらず、今さっき置いた時と同じように新しく、つややかで、きらきらと光っていた！

本来、これは宝のスカーフだった。しかし、次男は知らなかった。

妻は自分が3年以上前に失くしたスカーフが見つかったのを見て、うれしくてしきりに叫んだ。

「早くわたしに渡して。3年以上も見なかったスカーフはいまだに新品みたいに鮮やかです」

次男は無造作にうすぎぬのスカーフを渡した。

誰が知っていただろうか。うすぎぬのスカーフが妻の手におさまると、突然雷が鳴り、稲妻が走り、暴風が四方から起こり、天地が暗くなり、次男は天地がひっくり返るように感じ、何も見えなくなった。

しばらくして、雷の音がやみ、風の音が小さくなった。またしばらくすると、少しも物音がしなくなった。次男は目を凝らしてみると、家もなくなり、農園もなくなり、妻と子どもも皆いなくなっていた。ただあの深緑色に輝く湖に透き通るように青い波だけがあるだけだった。

次男は大変焦り、あちこち探して、3年前に小さな竜と別れた分岐点にやってきた。このとき、次男はようやく小さな竜が別れ際のことばを思い出した。そこで、悲しみ、泣きながら、叫んだ。

「小さな竜よー、小さな竜よー」

2回叫ぶと、空に黒い雲がやってきて、続いて雷が鳴り稲妻が走り、また暴風が方々から起こった。目をあけようとしても風であけられなかった。目を閉じて座っていると、突然耳のそばで打ち解けて呼ばれるのが聞こえてきた。

「善人よ、はやく目を覚ましなさい」

目をあけると、まさに小さな竜が来ていた。口を開くのを待たずに、次男は先に悲しげにひとしきり泣いた。小さな竜は次男にいったい何ごとなのかと尋ねた。そこで次男はこの次第を一部始終話した。

「ああ、そういうことでしたか。ちょうどわたしは北天宮で重要な事柄について協議しているところでしたよ。あなたの呼びかけを聞いて、何か起きたと知り、大急ぎであなたのところに見に来ました」

と小さな竜は言った。

「おまえさんは本当に愚か者です。なぜあのスカーフを彼女に渡したのですか！おまえさんは彼女が誰か知っていますか？彼女は東天宮の竜王の三公女で、西天宮の竜王の息子の婚約者です。3年前、彼女が緑色の宝の湖に身支度に行ったのは翌日西天宮に嫁に行く準備のためでした。それをわたしが中に立ってこっそり悪だくみをして、うまくいかないようにし、彼女とあなたを縁組させたのです。分かりましたか？」

「それなら彼女と子どもは今どこにいるのですか？」

次男は落ちつかない様子で非常に焦っていた。

「三公女は今赤ちゃんを連れて東天宮にすでにお帰りにになりました」

「わたしは今どうしたらよいですか」

小さな竜は慰めて言った。

「おまえさん、慌てなさんな。ただわたしの言いつけを聞きさえすれば、三公女たちを見つけることができます」

次男は大急ぎでうなずいて承諾した。小さな竜は続けて言った。

「おまえさんはわたしの背にまたがり、また眼を閉じ、耳をふさぎ、話をしてはいけません。わたしたちはしばらくすると東の天竜宮に着きます。東の天竜宮の頂に庭園があります。わたしはおまえさんを庭園内に送り届けたら行きます。おまえさんは南側から回り道をしていき、西門から宮中の内院に入ります。入ると、三公女が東側の棟の前で刺繍をしていて、おまえさんの息子が中庭で遊んでいるのが見えます。三公女はおまえさんが来たのを見ると、必ずうれしそうにおまえさんの方に向かって笑いかけます。おまえさんは見えないふりをして、先に息子を抱き上げて北の寝所に入ります。寝所の中には東西に玉でできたベッドがあります。西の玉のベッドに大きな黒い竜がふとんをかぶって寝ています。それは東天宮の竜王です。東の玉のベッドに大きな黄色の竜がふとんをかぶって寝ています。それは東天宮の王の妻です。入ったら、おまえさんは西のベッドに向かって『岳父、こんにちは！』と声を出して言います。西の玉のベッドに寝ていた黒い竜はすぐに黒い顔の男の老人になり起きあがります。おまえさんはまた東の玉のベッドに休んでいる黄色い竜に向かって『お義母さま、こんにちは』と声を出して言います。東の玉のベッドに休んでいた黄色い竜はすぐに黄色い顔の老婆になって起き上がります。彼らはおまえさんを見るとすぐに、『地上の俗世間からやってきた俗人が、どんな用があるのか？』と尋ねるでしょう。おまえさんは、『わたしはわたしの妻と子どもが恋しくて、わざわざ彼女たち母子を訪問しに飛んで来ました』と言います。彼らがもし誰がおまえさんを送ってきたのかと聞いたら、おまえさんは自分でできましたと言い、決して彼らにわたしが送ってきたと言ってはいけません。もう一つ、日が暮れて泊まるときにおまえさんは一段と用心しなくなってしまう。東天宮の竜王はおそらくこっそりなんとかしておまえさんに危害を加えようとするでしょう。し

かし、安心してください。肝心な時にはいつもおまえさんを助けてくれる人がいます」

話し終えると、小さな竜は次男を東天宮の竜王の素晴らしい天竜宮の頂にある庭園に送ると行ってしまった。

次男は小さな竜の言いつけに従い、宮中の内院に着くと、やはり自分の息子が庭の中で遊んでおり、妻が東側の棟の前に座り刺繍をしているのが見えた。妻は次男が来たのを見ると、満面の笑みを浮かべて喜んだ。次男は妻を見えないふりをして、息子を抱き上げて北の寝所に入った。寝所の中にはやはり東西に玉でできたベッドがあった。ベッドの上にそれぞれ竜が一匹ずつ横になっていた。次男があいさつをすると、やはり本当に黒い顔の男の老人が起き上がり、もう一方で黄色い顔の老婆が起き上がった。同時に大声で尋ねた。

「地上の俗世間からやってきた俗人がわたしの宮殿の中に闖入してどんな用があるのか？」

「わたしはわたしの妻と赤ん坊が恋しくて、わざわざ彼女たち母子を訪問しに駆け付けました」

と次男は慌てて答えた。

「誰がおまえさんを送ってきたのか」

と竜王は不愉快な表情だった。

「わたしが自分でやってきたのです！」

話しているうちに、夜がおとずれた。三公女は入ってくると息子を連れて出ていった。彼女たちが出ていったあと、次男も立ち上がり一緒に出ていきかけたが、竜王に遮られた。

「今晚は俗世間からやってきたこの肉団子を北東の部屋に住ませよう」

竜王は召使に言いつけた。

次男が北東の部屋に連れられて眠って間もなく、三公女がこっそりと部屋の中に入ってきて言った。「今晚寝るときには用心しなくてはなりません。ヒツジほどの大きさの2匹のシラミが入ってきておまえさんを食べようとします。やつらが入ってきたら、すぐにおまえさんは言いなさい。『ほら。三公女がおまえさん方をつまみ殺すから気をつけろ！』このように言うと、やつらはおまえさんを食べようとしません」

と言い終わると彼女は出ていった。

三公女が出た後、次男はどうやっても眠れなかった。

夜中に、部屋のドアが突然バタンと音を立てて開いた。ドアの外からおおいばりで2匹のヒツジくらい大きいシラミが入ってきた。次男は慌てて口を開けて言った。

「ほら、三公女がおまえさん方をつまみ殺すから気をつけろ！」

2匹の大きなシラミはしばらくあっけにとられてから言った。

「ああ、三公女が望まないならやめよう」

言い終わると、向きを変えて逃げた。

翌朝、東天宮の竜王は息子に命じた。

「昨晚、俗世間から来た肉団子は2匹のシラミに食われた。今、おまえは北東の部屋に行って、やつ
の骨を拾って、わしに見せなさい」

王子は行って少しすると戻ってきて報告した。

「王である父に上申します。3番目の姉の夫はぐうぐうとぐっすり寝ています」

「誰が、あいつがおまえの姉の夫と言ったのだ？」

竜王は怒りほえた。

「それは3番目の姉がわたしに言ったのです」

「この件について、おまえは彼女の話聞くでない」

と竜王はまた叱った。

夜、東天宮の竜王はまた家族に言いつけた。

「俗世間からやってきた肉団子を北西の部屋の中に住まわせろ」

次男は北西の部屋をあてがわれてまもなく、三公女がまたこっそりと忍び込んできて言った。

「夜はもっと用心してください。今晚、ウシくらいの大きさのサソリが入ってきておまえさんを食います。やつらが入ってきたら、おまえさんは急いで『見ろ、三公女が赤いベルトでおまえらを絞め殺すぞ』と言いなさい。このようにすると、やつらはおまえさんに手出ししなくなります」

言い終えると、彼女は行ってしまった。

夜中まで待っていると、やはりウシくらいの大きさの2匹のサソリが入ってきた。次男は急いで言った。

「見ろ、三公女が赤いベルトでおまえらを絞め殺すから気を付けろよ」

2匹のサソリはしばしあっけにとられてから言った。

「三公女がおまえに危害を加えるのを望まないなら、おまえを見逃してやろう」

と言いながら、向きを変えて去っていった。

夜が明けてから、竜王はまた王子に北西の部屋の中の「俗世間の肉団子」の骨を拾ってくるように命じた。王子は北西の部屋に行ってみると、次男はまさにいびきをかいて寝ているところで、戻ってきて王である父に報告した。竜王は聞くとひどく驚いた。

「なんだと、俗世間から来た肉団子はなんとすごいのだ！今晚やつを南西の部屋で寝かせよう！」

夜、次男は南西の部屋をあてがわれて寝入ってすぐに、三公女がまた慌ててこっそりと入ってきて言った。

「大変です。今晚、水がめぐらいの太さのニシキヘビ2匹がおまえさんを食べにきます。やつらが入ってきたら、おまえさんはすぐに『見ろ、三公女が赤い靴でおまえらを踏み殺すぞ』と言いなさい。このようにすると、やつらはおまえさんを食べようとしません」

彼女が行ったあとで、次男はびくびくしながら横になっていると、「ぎあー」という音がして、ぞっとするような冷たい風でドアが開き、2匹のみずがめくらいの太さのあるニシキヘビがぱっくりと大きな口を開けながら、ドアから入ってきた。次男は驚いて毛が逆立ち、続けざまに大きな声で叫んだ。

「見ろ、三公女が赤い靴でおまえらを踏み殺すから気を付けろよ」

2匹のニシキヘビはすぐにその場でしばらくあっけにとられていたが、ようやく言った。

「ああ、三公女がこいつを傷つけるのを嫌がるのならやめておこう」

身をひねって恐れをなして逃げ出した。

夜が明けてすぐ、竜王は待ちきれずに息子に命令した。

「おまえは早く南西の部屋に行き、中の「俗世間の肉団子」の骨を拾ってきてわしに見せなさい。昨晚、もっとも凶暴なわしの2匹のニシキヘビは期待を裏切らなかったにちがいない」

王子は行った。次男はやはり前の2日の朝と同じように、ぐうぐうとぐっすり寝ているのを見ただけであった。王子は戻ってくると、ありのままを竜王に上申した。

竜王はひたすら俗世間の愚直な次男を取り除きたかった。しかし、あらゆる手を使ったが役に立たなかった。ちょうどそのとき、西天宮の王子がやってきた。

東天宮の竜王は大変心を込めて西天宮の王子をもてなした。逆に、愚直な次男に対しては恨みを抱いていた。竜王はひそかに一計をめぐらし、機会に乗じて愚直な次男を追い出したかった。人を使わして次男を呼び出し、次男と西天宮の王子に面と向かいながら言った。

「わしは1人の娘を2つの家に嫁にだすことはできない。今おまえたち2人そろった。わたしが問題を出しておまえたちを試すしかない。誰がもっとも賢くかつ能力があるかをみて、娘を正式に嫁にやろう。それだけでなく、わしの王位を譲ろう」

竜王は2問出し、2人に1問ずつ選ばせた。1問目は日が暮れる前に俗世間に全部でいくつの土地、樹木、山川、人口があるのか、すべて数えて絵に描いて持ってくるというものであった。第2問は日が暮れる前にヒツジの腹の皮を張った天鼓を持って戻ってくるというものであった。

次男は心の中で第1問はあまりにも難しいと考え、第2問を選んだ。

本殿から出てくると、次男は三公女が自分を東の棟に来るように呼んでいるのを見た。行くと、三公女が尋ねた。

「父王はおまえさんに何をさせますか」

次男は答えた。

「問題を出しておれと西天宮の王子を試験します。日が暮れる前に問題を解くよう要求しました。しかも、先に課題を解けた人に公女を嫁がせると言いました」

「2問はどんな問題ですか。おまえさんはどちらを選びましたか？」

三公女は慌てた様子で問い詰めた。次男はありのままに竜王がどのような問題を出し、自分がどのように問題を選んだのかを聞かせた。三公女は聞き終わると、思わず息をのんだ。

「ああ、おまえさんは本当に愚か者ですよ。俗世については好きなようにでっちあげることができます。だけど、ヒツジの腹の皮で作った天鼓はたった1つだけで、南天宮にあります。そこに行き戻ってくるのにおまえさんは6ヶ月かかります。たった1日でどうやって取って戻って来れるのでしょうか！」

次男は聞くとうろたえた。

「それならどうしよう？おまえさん、何か良い方法はありますか？」

「こうしましょう」

三公女は少し考えこんでから言った。

「おまえさんに2升の鉄でできた豆とわたしの頭に挿している宝のくしを半分折ってあげるの、それらをもって早く南に向かいなさい。おまえさんが行った後、わたしはここで西の竜宮の王子を引き留めておきます」

次男は口をはさんで言った。

「おまえさんはどんな方法で、西竜宮の王子を引き留めるのだい？」

三公女は行った。

「それはおまえさんが心配することではありません。ただ急いで南に向かいなさい。南に向かっていくとしばらくしてお寺があります。お寺の中の和尚たちはちょうど泥をこねて泥菩薩を作っているところです。和尚たちが寺の中に入りご飯を食べるのを待って、おまえさんはすぐに服を全部脱いで彼らが作り終えた泥の山に飛び込んで、泥の中に全身転がり、そのあと、台の上に上って座ります。和尚たちがご飯を食べ終わり戻ってくると、おまえさんが目を閉じて台座にじっと座っているのを見て、ある大仙人が通りがかりに経典を伝授していると思い、神童を派遣してヒツジの腹でできた天鼓を神速で取りに行き、おまえさんの足元に置きます。そのあと一斉に這いつくばっておまえさんに叩頭します。和尚たちが這いつくばって叩頭しているすきに、天鼓を取って急いで走って戻ってきなさい。和尚さんたちは騙されたことが分かったと、すぐにおまえさんを追いかけます。おまえさんは二升の鉄の豆を後ろにまきなさい。このとき、鉄の豆一粒一粒がすぐに鉄山に形を変えます。その後、おまえさんはくし半分を後ろに投げ捨てなさい。そのくしもまたすぐに森といばらに変わります。鉄山と森といばらが和尚たちの道をふさぎます。このようにしておまえさんは無事に戻って来れます。おまえさんは戻ってきたら少しも立ち止まることなく先に父王に謁見しなさい」

次男を行かせてすぐ、西の竜宮の王子が墨と筆と紙を持って入ってきた。三公女はうれしそうな様子を装って王子に尋ねた。

「王子さま、それら墨と筆と紙をもって何をするのですか？」

「お義父上がわたしに日が暮れる前までに俗世界の人、土地、山川、樹木すべて数えて絵に描いて渡すように要求しました。わたしは俗世界に発つ前に公女に一目会いに来ました」

三公女は落ち着いて言った。

「あら、それならなぜ俗世界に行く必要があるの？王子様が必要な数と絵はすべてわたしの頭の中にできあがっています。わたしたち2人は午後に時間を少し割いて絵を描いてもっていき、報告できます。今から王子さまはわたしに付き添って一緒に気ままにおしゃべりしましょう。わたしが話しますから聞いてください」

王子は大変感激して、素直に応じた。そこで、三公女は話の扉を開けて、絶え間なく話し始めた。

「ああ、自分に起きたことをあなたに話して聞かせます・・・」

「3年前、つまりわたしがお嫁に行く当日、不幸がわたしに降りかかりました。その日、わたしは緑色の宝の湖に行き、身支度をしているとき、思いがけず強盗にあい、わたしは天に叫んでも返事がなく、地上で叫んでも返事がなく・・・」

「ああ、それを話し始めると、わたしは悲しみにくれてしまいます。3年間、わたしは毎日あなたさまを恋しく思い、わたしを助けてくれるのを待っていたのです。ですが、ずっとあなたさまを見ることはなく、わたしは毎日涙で顔を洗い、お茶もご飯も食べたいと思わず、3年間1回も髪をとかさず、まさかわたしの髪にいやなシラミがわくなんて、ああ・・・」

三公女は話しながら、顔を涙でぬらしながらむせび泣いた。王子も感激し、ひそかに涙を流した。三公女はこの様子を見て機会に乗じて甘えた声で言った。

「おまえさま、わたしの頭にいるシラミを捕まえてください」

西の竜宮の王子は一心に三公女のシラミを捕まえはじめた。一匹、一匹丹念に捕まえたが、いつまでたっても捕まえ終わらない。これは三公女が王子の時間を稼ぐ手段だということを王子は知らなかった。時間はこのようにしていつの間にか過ぎていった。

日が暮れる前に、次男はヒツジの腹の皮でできた天鼓を抱えながら慌ただしく天宮に帰ってきた。竜王は一目見て大変驚いた。ああ、このヒツジの腹の皮でできた天鼓は少なく見積もってもやつには6ヶ月かかるはずだ。しかし、やつは一日にも満たないわずかな時間で取って帰ってきた。これは本当に奇跡である。王は慌てて外をちらっと見て、西の竜宮の王子の姿が見えないので、ひそかに迎えに人を遣わせた。報告して言うには西竜宮の王子は三公女の寝所にいると言う。竜王が中に入ってみると、西竜宮の王子はちょうど三公女のシラミを捕まえているところだった。いらいらして王子に尋ねた。

「おまえさんの題はすでに終わっているだろうね？」

西竜宮の王子はもみ手をしながら言った。

「これが答えです」

竜王は本当に怒り狂った。

「おまえはふがいなしの王子だ。わしのもとから早く出ていけ！」

このようにして、善良で愚直な次男は東天宮の竜王の三公女を娶っただけでなく、竜の模様のついた礼服を着て、朝廷の官職を得て、もっぱら俗世界の風と雨を司る素晴らしい竜王となった。

《原題》「憨老二的奇遇」168-181 頁。タイピンジェラガル口述 1988 年収集整理

（2）長と短の物語

むかしむかし、老夫婦がおり、老人の姓を常といった。この老夫婦には一人息子がおり、名を長といった。

ある日、老夫婦は息子を近くに呼んで言った。

「わたしたちの故郷は山も水も貧しくてにっちもさっちもいかない。ことわざで『樹木は移せば死んでしまうが、人間は動いても生きている』と言う。わたしたちは年老いて、動けなくなった。わたしたちが死んだらすぐにうちの 2 頭のラバを連れて遠くに行き生計を立てなさい。しかし、おまえよ、必ず覚えておきなさい。どこに行ったとしても、天に背き道理にもとる悪事を働いてはならない。どんなときでも、弱きを助け、貧困者を救うことを忘れてはならない。衣服があれば分けあって着て、食事があれば分けあって食べ、自分のことだけ一生懸命になってはいけない」

やがて、老夫婦は相次いで亡くなり、常長は父の言いつけに従い、葬儀が終わったら、一家の財産をお金に換えて、故郷に別れを告げ、2 頭のラバを連れて生計を立てに遠くに旅に出た。ある日、長が道を急いでいると、ぼろぼろの服を着た人にばったり出会い、尋ねた。

「おまえさんはどこから来て、どこに行くのだい。何をしている人かい？ なんとかかわいそうなことだろう」

その人は答えた。

「わたしはどこからか来てどこかにいきます。わたしはしがない乞食です」

長はその乞食にとっても同情し、乞食を道端につれてきて休ませ、ラバにかけてある袋からほしいを少し取り出し、2 人は食べながら話をした。

「姓は何ですか。名前は何と言うのだい」

長は尋ねた。

「わたしの姓は段で、名は短と言います」

その人が答え終わると、反対に尋ねた。

「姓は何ですか。名は何ですか？」

「ええと、わたしの姓は常で、名は長です。おまえさん、早く食べなさい。早く食べなさい」

長は心を込めてもてなした。

段短は常長が2頭のラバをもち、さらに路銀を積んでいるのを見て、とてもうらやましかった。段短は言った。

「あれえ、おまえさんは長、わたしは短と言います。わたしたち2人はものさびしいはげた山頂で思いがけなく出会いました。本当にうまれつきの兄弟ですね。わたしたち2人は義兄弟の契りを結びませんか」

長は自分に兄弟がおらず、短が自分と義兄弟の契りを結びたいというのを聞いて、とてもうれしかった。その場で2人は地に頭をつけ礼をした。年齢順にしたがって、長は兄、短は弟になった。

義兄弟の契りを結び終わると、長はさらに短を愛おしく思い、言った。

「わたしたちは一度兄弟になったからにはお互いに助けあっていくべきです。こうしましょう。兄であるわたしは裕福ではないが、このように2頭のラバと路銀が少しあります。今、あなたに半分あげます。おまえさんはラバ1頭を連れて商売をしてお金を稼いで故郷に戻り、家族を養い生活しなさい。二度と乞食をする必要はなくなります」

短はさらに路銀があると聞いて、心が動き、両目はじっと2頭のラバに積まれてある袋を見つめ、しきりに首を振りながら言った。

「兄さんはわたしと別れても惜しくないようですが、わたしは兄さんと別れるのに忍びないです。わたしたちは義兄弟の契りを結んだのです。もし兄さんがわたしをお嫌でなかったら、わたしはずっと兄さんについて行き、商売をしても、ほかのこともしてもよいです。なんと言っても兄弟2人一緒なら利点も多く、少なくとも互いに協力し、手伝えます」

長は聞くと道理があると思い、うなずいて承諾した。2人は道端でずっとおしゃべりし続けて一晩明かし、翌日早朝また旅立った。午前になって、短は言った。

「ああ、重い旅行具を積んでいる家畜をつれていくのは時間がかかりすぎます。このようにしてはと思います。兄さんはラバを連れてゆっくり来てください。わたし一人手ぶらで先に前に走って行って道を探し、よさげな店を探してきましょう。今晚はわたしたち2人でゆっくり休んで元気になりましょう。いいと思いますか」

「いいです」

長は愛おしげにこの弟を見て、路銀を少し取り出して短に押し込み、落ち着いたと言った。

「道中、注意してください」

「分かっていますよ。安心してください」

短は長が従順に承諾したのを見て、路銀をしまつて慌てて道を急いだ。

短は一気に数十里行くと、道端に店があるのが見えた。店に入ると、長がくれた銀を勘定台にむかって投げると、あらゆる金持ちと同じように、気前よく、思う存分たらふく飲み食いした。食べ終わ

ると、爪楊枝で歯をほじりながら、やはり金があるのはいいなあと考えた。もし、なんとかして常長の2頭のラバと積んでいるすべての銀をすべて自分ひとりの手中におさめることができたなら、どんなにいいことか！このように考えた途端、にわかに悪意が生じた。こっそりと店主に言った。

「おい、店主。道中家畜を連れてくる人に出会った。やつが連れてくる2頭のラバは背が高く大きく、どちらもずっしりと重い金銀財宝を積んでいた。どんな方法だったかやつを始末できると思うかい？もちろん、うまくいったら、おれさまは必ずその分け前の半分をおまえさんにやるよ」

店主も守銭奴で、金銀財宝が分け与えられると聞いてすぐ、悪い考えに動かされた。2人は陰でこそそそとしばらく相談し、短はうれしそうに言った。

「おまえさんの考えは実によい。夜中にやつが来たら、おまえさんはくれぐれも表情に出してはいけないよ。また、おれさまがここに来たことがあることを話すんじゃないよ」

店主は合点してうなずいて同意した。

短は店の中から出てくると、来た道に沿って10里ほど引き返し、道端に座って長を待った。

少しして、長が2頭のラバを連れてやってきた。短は心を込めた様子で前の方へ進み出て迎えに行き、長に尋ねた。

「兄さん、歩き疲れたでしょう？」

「おまえさんも疲れただろう？店は見つからなかったのかい？」

「あれまあ、店を探すどころではなかったのです。わたしは焦って、ここで兄さんをずっと待っていて、ちょうど兄さんを迎えに戻ろうとしていたところです」

短はいかにもわざとらしく言った。

「お昼にここまで来てちょうど一休みしようとしたとき、突然数頭のオオカミの影がああたりの草むらにちらつしたこと気が付きました。日が暮れて、兄さんがやってきて、ここにオオカミがいるのを知らず、少しも用心することなくオオカミに食われてしまうのを恐れて、さらに前に進もうとせず、ずっとここに座って兄さんを待っていたのです。兄さんを守ろうとしたのです」

長は聞くと大変感激した。このわたしの兄弟はなんて立派な心の持ち主なのだろうよ！知り合って2日もたっていないのに、このようにわたしに対して誠心誠意対応してくれる。長はこのように考えた。

2人は仲良くしゃべったり笑ったりして、しばらくして短が先ほど来たあの店にやってきた。

宿をとると、店主がやってきて雑談した。短は店主と顔見知りでないようにふるまい、尋ねた。

「店主は観相ができるかい？わたしたち2人の気立てはどのようなだろうか？」

店主はうなずくと、もったいぶって長と短の人相と手相を見て、最後に短の手を引っ張りながら、言った。

「やはりおまえさんの気立てがよい」

短は得意げに長に言った。

「みなさい、他人の店主がわたしの気立てがよいと言っています。兄さん、今後はわたしの話をよく聞いて物事を進めれば間違いないです」

長は店主が短の気立てがよいと言ったのを聞いて、とてもうれしかった。

一晩休んだ。翌日の朝、短は長に言った。

「東側のあの山を越えたところに町があり、町の中に布をはじめたくさんの商品があり、品物がよく値段が安いと聞いたことがあります。わたしたちはそこに行ってみてみましょう。もし本当によかったら、わたしたちはいくつか買って草原地帯に行ったら売れば、必ず大金を稼ぐことができるでしょう」

長は聞いて本当だと思い、心の中でしきりにそろばんをはじきながら、もしお金を少しでも稼いで戻ってくることができたなら、まず先にこのかわいそうな弟に妻を迎え、独立して家庭を築かせようと考えた。

2人はラバを連れてしばらく行くと、深くて下が見えない断崖絶壁が道をふさいでいた。ちょうど長がこの断崖絶壁の前で腰をまげて道を探しにのぞいているとき、短は後ろから長の足が踏んでいる板石を力を込めて持ち上げた。長は石と一緒に深い淵へ転がり落ちていった。短は長の財産を手に入れると、店主がやってきて分け前を取るのを恐れて、慌ててラバを連れて、回り道をして逃げて行った。

長は転げ落ちたあとも、墜落死することなく、ただし両目が木の枝に刺されて失明した。もうろうとしていると、天空から老人の大きく朗々とした呼び声がかすかに聞こえた。

「あのかawaiiそうな若者を早く助けに行きなさいよ」

しかし、しばらく待っても人が来たように思えず、長がいぶかしく思っていると突然耳のそばで風がびゅうびゅうと音を立てているのが聞こえて、まるで自分も風に乗ってふわふわと揺れ動いているようである。しばらくすると、風がとまった。耳を澄ましても、少しも物音はしなかった。

不思議なことに、誰かが人を助けるよう叫ぶ声が聞こえたので、誰かが来るだろうと思ったが、結局、一度風が吹いただけだった。これはどうしたことだろう？長は手探りで前に向かって数歩歩くと、壁にぶつかった。

「これは誰かの家ですか？」

長は壁に沿って手探りで半周すると、門を見つけた。続けて

「誰かいますか？」

と3回叫んだ。返事はなかった。中に入り一周手探りすると、泥でできた数体の仏さまを見つけた。ああ、これはお寺だったのだ。

この時、長はとても疲れを感じ、手探りで、泥でできた台の後ろに行き座って休んだ。座ると寝てしまった。どれくらいの時間が経ったろうか。おそらく、日が暮れてからであろう。物音で目が覚めた。ドタバタと、トラとオオカミとキツネが入ってくるのが聞こえた。

とても恐ろしい音が聞こえ、長は本当にどうしていいのか分からずにいると、突然キツネが話すのが聞こえた。

「おい、トラ兄さん、今日は外に出て何を食べたのかい？」

「今日おれさまは北西にあるあのバヤン¹¹家の肥えたウシを食べたぞ」

トラは得意げに言った。

「オオカミ兄さん、おまえさんは今日外に出て何を食べたのだい？」

キツネはまた尋ねた。

「おれさまは今日北西にあるあのバヤン家の太ったヒツジを食べたぞ」

オオカミも得意げに答えた。オオカミとトラは同時に尋ねた。

「キツネよ、おまえは今日何を食べたのだい？」

「おれは今日あのバヤン家の子ヒツジを食べやした」

トラとオオカミとキツネはべちゃくちゃとよく話し、きりが無い。とくに、あのキツネはとても興奮して、ひっきりなしにあれこれ尋ねた。

「兄さん、この頃、あのバヤン家では何が起きているのですか。ラマを読んでお経をあげてもらっていますよね？」

「ああ、あれはバヤンの大事な娘が病に臥せっているためだ。バヤンがラマを呼んで娘のためにお経を読んでもらって邪気を払っているのだよ」

「あの娘はいったいどんな病なのですか。兄さん、知っていますか」

「おお、あれはバヤン家が家を建てる際に残った草の山が北西側の家の壁のすみに放置されて、時間がたつて、誰も動かす人がなく、中に頭がブタ、体がヘビの妖怪がもぐりこんだのだ。この妖怪が最近娘に起きたたたりの原因で、娘は取りつかれて、人とも化け物ともつかない状態になり、病状はどんどんひどくなっているんだよ」

「ああ、なんとそういうことだったのか。それならどんな方法なら本当に娘のために邪気を払い、病気を治すことができるのだい？」

「それはそんなにむずかしいことでないよ。具体的には、20人の力のあるたくましい若者がいれさえすればよい。それぞれこん棒をもってその干し草を囲み、草に火をつけて、草が燃え出したら、妖怪が飛び出してくるので、20人の若者が一斉に殴りはじめる。このようにしたら、殴り殺さなくても、妖怪を火の中に追い込んで焼死させることができるさ。妖怪が死にさえすれば、娘の病気はすぐによくなるよ」

「ああ、これは本当に不思議なことだ」

¹¹ モンゴル語で富、金持ちの意。

キツネはこの件について聞き終わるとすぐにまた別のことを言い出した。

「それなら、あのバヤン家の家畜はなんであんなに簡単に俺たちに捕らえられるのだい？」

オオカミは言った。

「それはバヤン家の近くに水がないからだよ。家畜は毎日数十里も離れた川辺に水を飲みに行くしかない。おれたちは家畜たちが水を飲みに行く途中で機会に乗じて遮り止めて捕まえるのだ！」

「まさかバヤン家の近くに水源がないわけではあるまい？」

「あるにはあるさ。やつらが知らないだけさ。やつらの家の門から百歩離れたところに3本のカラガナ（マメ科の灌木）¹²がある。その下が、泉が湧き出るところさ」

「それならどうやって泉を掘り出せるのかい？」

「それはな、その3本のカラガナの下を3尺（約1メートル）深く掘れば、大きな石が1つでてくる。その大きな石をどかしさえすれば、その下に抑えられていた泉が、きれいな水が噴き出さだろうよ。だが、その泉がいったん噴き出したら、あの家の家畜どもは二度と数十里も離れたところに行き、水を求めることもなくなるから、おれたちはこんなに簡単においしい食事にありつけなくなるぞ」

「ああ、そうなんだね」

キツネは飽きもせず言った。

「世の中には本当に不思議なことが多いのだなあ。今日わたしは腹いっぱい飲み食いした後、バヤン家の東側にある林の中でぶらぶらしていたら、3本の大きな大きな榆の木を見つけた。3本ぴったりと一緒に生長していて、真中の木に2つの穴が開いていて、しばらくおきに、穴の中から水がしたたり落ちてきて、涙と同じようだった」

トラは言った。

「ああ、おまえさんが見たのはあの神樹だよ！木の穴からしたたり置いた水は霊験あらたかな霊水だ。盲目を治すのだ。盲人が見えなくなった目にその水を9回つけると、目はすぐに光をとり戻すことができるのだよ」

トラとオオカミとキツネはあれやこれやとおしゃべりをずっと続けてようやく寝た。夜が明けるとすぐにバタバタと出ていった。トラたちが出ていくと、長はようやくほっとした。長は手探りで寺の門を出て、心の中で病魔に襲われているバヤンの娘を心配した。長は歩きながら、もしあれら動物の話が本当なら、バヤンの娘は本当に可愛そうで、なんとかしてバヤンの家を探し出して彼女を救い出してこそ正しいと思った。しかし、長の眼は道が見えず、焦っているときに突然老人の声が聞こえた。

「来なさい。善良な若者よ。ゆっくりこっちへ来なさい」

と言いながら手が伸びてきて、長を引っ張り、

¹² 中国語で柠条。マメ科ムレスズメ属。 *Caragana* spp.

「怖がることはない。善を成せば必ず良い報いがある。おまえさんの両親は存命中やはり善人で、一生誰にも損を与えるようなことをしたことがない。今おまえさんは自分が災難に見舞われている中でも、おまえさんは自分の利益を考えないだけでなく、先に他人のことを思いやっている。本当に得難い善良な心です。今、わたしはおまえさんを北西にあるバヤンの家の門の外に送ります。おまえさんがそこでしばらく待っていると、人が出てきます。彼らがおまえさんにどのようにやってきたのかと尋ねたら、おまえさんはラマのお経の音について自分で、手探りでやってきたと言いなさい。そこに行ったら、すべきことをしなさい。おまえさんは自分でどうすればよいかわかるだろう。恐れる必要はない」

と言いながら、風が吹くと、続けて長は自分も風にのってゆらゆらと揺れるように感じた。しばらくして、風の音がおさまると、あたりはしーんとしていた。長は手を伸ばして手探りし、大きな門を探し当てた。少し待つと、大門が開き、中から人ができてた。

「おい、おまえさんは何をしているのだい？人の家の門の前に立ってさ？」

「わたしは乞食に来たのです」

「誰がおまえさんを連れてきたのかい？」

「自分でラマのお経の声を聴いて手探りでできたのです」

「乞食さえなんで野次馬にやってきたのか。早く行きなさい。そうでないとバヤンに見られたら怒られます。彼はこの頃思い悩んでいるのです！」

長は言った。

「バヤンの家の門に来たのですから、行くにしても一口食べてから行きます」

その人は仕方なく、長を厨房に連れていくほかに、椀にご飯をもって長の手へ手渡すと、長に早く食べて出て行くように言った。長が食べ終わると、その人は早く行くようにせかした。長はぐずぐずして出て行かず、茶が飲みたいと言った。その人は長に茶を椀に注いだ。飲み終わると、また早く行くようにせかした。長はタバコが吸いたいと言うと、その人はキセルを手渡して言った。

「おまえさん、タバコを吸って早く出て行きなさい。わたしはバヤンの召使で、ほかにすることがあって忙しいのです」

長は言った。

「わたしが行きたければ、おまえさんが引き留めたくとも引き留められません。だが、今日は何の日なのか伺いたいです。なぜお屋敷からお経の音が聞こえたようなのですか」

「ああ、触れてくれるな。話すと長い。わたしたちの主人の娘が変な病にかかったのです。当初、主人はできる限りのあらゆる医者呼んでかわるがわる診せたが、治らない。続けてできる限りあらゆ

るラマ、和尚を呼んでお経を読み、チャム¹³をしたが、役に立たなかった。ほら、この一団のラマたちが来て半月、経文を読んでいるが、お嬢さまの病がよくなる気配はない」

「娘さんはいったいどのような病を患っているのですか。そんなに治すのがむずかしいですか？わたしに診させてくださいませんか」

「おい、おまえさんが何の役に立つのか！まさかおまえさん、乞食がお嬢さまの病を治せることができるのかい？」

「これについておまえさんはかまうな。人を救うのことは急を要しています」
その召使は主人に上申するほかなかった。バヤンは外に人が来て、自発的に娘の病を見てくれると聞いて、とても喜び、急いで言った。

「早くお連れしなさい」

バヤンは長が盲人なのを見て、尋ねた。

「この盲人、どうやってわたしの家の門を見つけ出したのですか。誰が送ってきたのだい？」

「わたしはラマのお経の声にしたがって手探りできたのです」

「おまえはどのような方法でわたしの娘の病を治すことができるのかい？」

長は真面目に詳しく娘の病状を尋ね、確信をもって言った。

「大切な娘さんは妖怪に取りつかれています」

バヤンは聞くと大変驚いて、急いで尋ねた。

「この妖怪は今どこに？わたしのかわいそうな娘は助かる望みがありますか？」

「お尋ねします。あなたさまのお屋敷を囲む壁の北西のすみに草の山がありますよね？」

「そうです」

「その干し草は長らく誰もひっくり返して日に干していませんよね」

「そのとおりです」

「それならあっています。誰もこの干し草の山を長らく動かさないのを見て、頭がブタで体がヘビの妖怪が中にもぐりこんで住みつきました。今そいつをやっつけさえすれば、あなたさまの娘さんの病はすぐに良くなります」

「どんな方法でその妖怪をやっつけることができますか」

バヤンは急いで尋ねた。

長は言った。

「むずかしくはありません。20人の、力があってたくましい若者と5尺の長さのこん棒を20本用意できますか？」

¹³ チベット仏教における仮面舞修会。

「20 は言うまでもなく、200 だって用意できます」

とバヤンは答えた。そこで長はかくかくしかじかと言い聞かせた。

その晩、バヤンは手にこん棒を持った 20 人の若者を連れて、その干し草の山をしっかりと囲み、その後、火を放ち、草を燃やすよう命じた。草に火をつけると、やはりその中から頭がブタで体がヘビの妖怪が飛び出してきた。20 人の若者がそれぞれ 20 本のこん棒を振りまわし続けると、その妖怪は身を隠すところがなくなり、最後に盛んに燃える火の中に追い詰められて死んだ。

バヤンは急いで屋敷にかけ戻ると、娘の病は本当に良くなっていた。バヤン一家は大変喜び、しばしどのように長に感謝してよいのか分からなかった。

娘は病がよくなると、長が自分の命を救ってくれた恩人だと知って、また彼が見目麗しいのをみて、自ら嫁になることを求めた。バヤンは長が非凡な人であると考え、さらにこのように娘が気に入っているので、当然 2 人の結婚がうれしかった。とっさに、屋敷でウシとヒツジを解体し、酒を出して酒宴のため、みんな忙しくなった。

婿に入り、新郎新婦の 2 人は毎日喜びに満ち、影がより添うようにずっと一緒だった。瞬く間に多くの日が過ぎ去った。ある日、長は突然身近にいるバヤンの娘に尋ねた。

「わたしたちの家の東に樹林がありますよね？」

「そうです」

「林の中にしっかりとくっついている 3 本の楡の木がありますか？」

「あります」

「おまえさん、わたしを連れて行ってくれますか？」

「もちろんいいです」

そこで、バヤンの娘は長の手をひいて、その樹林の中にやってきて、しっかりとくっついている 3 本の大きな楡の木を探し出した。長は手を伸ばしなでると、2 つの穴を見つけた。その中からやはり外に向かって水がしたたり落ちていた。長は手に水をさっとつけて、自分の両目にそれぞれ 9 回ずつぬると、目はすぐに光を取り戻した。

バヤンの娘は大喜びでこの素晴らしい出来事を父に告げた。バヤンはうれしくてしきりに叫んだ。

「早く連れてきてわたしに見せなさい」

数日が過ぎて、長はバヤンに尋ねた。

「なぜわたしたちの家畜は数十里も離れた川辺に行って水を飲まなくてはならないのでしょうか？まさか近くに水源が一つもないのですか？」

「わたしは近くで水を探しました。しかし、いたるところ掘っても少しも水は出てきません」

「探す場所が間違っているのではないのでしょうか？わたしたちの家の大門の外から百歩離れたところにある 3 本のカラガナの下に水はあると思います」

バヤンは婿の話にしたがって、人を呼んで3本のカラガナの下を長いこと掘ると、やはり澄んだ泉の水が噴き出してきた。それ以降、バヤンの家は飲用水と家畜の水飲みに二度と数十里も離れたところに行き、水を運び、家畜に水を飲ませに行かせる必要はなくなった。

バヤンは長がこのような賢く善良で、できないことはないのを見て、自分の大事な娘の病気を治しただけでなく、何年も水源を見つけることができなかった家に水を見つけたので、さらに長を重んじ、家屋敷すべてを長に任せた。長たちの暮らしはますます豊かになった。

他方で、財物を見て盗み心を起こしたあの短は長を山から突き落とした後、2頭のラバと少ないお金を手に入れ、東山のあの町にやってきて飲み食いして遊んで暮らした。しばらくして路銀をすっかり使い果たし、2頭のロバさえ売って金に換えたが、使い果たした。

一時金持ちになった短はまたたく間に乞食になり果てた。ある日、短は乞食をしてバヤンの家に行ってきた。偶然、長がこの家の中で豊かに暮らしているのに気がつき、不思議に思った。聞くと、長はバヤンの婿であることを知り、さらに何が何だかさっぱりわけが分からない。この長はなぜ断崖の上から下に落としたのに死んでないばかりでなく、ここにやってきてバヤンの婿になっているのか？そこで、短はまた厚かましく長のそばに行き、十分心を痛めた様子を装って言った。

「ああ、兄さんを見つけました。あの日、おまえさんは不注意で山を滑り落ちましたが、わたしはつかむことができませんでした。泣き叫びながら急いで崖を転がり落ちておまえさんを探しました。ですが、結局影すら見つかりません。それ以降、兄さんを思いすぎて病気になり、病気がよくなってからなんとか起きあがりあらゆるところを探し、ずっと乞食をして苦しみを味わい尽くしても兄さんの行方が分からない。兄さんがここで幸福な暮らしをしているなんて思わなかったです」

善良な長は、短が自分を探すためにたくさんの苦勞をしたと聞いてとても感激し、自分が崖の上から落ちた後の経験を一部始終、短に話して聞かせた。

短はそれを聞くと、珍しいこともあるものと思った。

「世の中にはこんなよいことがあるのだな？」

そこで、短は無言で引き返して去っていった。

短は一息で寺の中に走ってくると、泥菩薩の後ろに隠れて座り、動物たちがやってくるのを待ち、動物たちのおしゃべりを盗み聞きするつもりだった。座ってしばらくすると、突然、長は目が見えなくなってからはじめて動物たちの対話を聞いて分かるようになったのだということに思い至った。そこで、短はとがった棒をひろうと両目を突き刺して失明させた。こうして得意満面な様子で、よいことがやってくるのを待っていた。

夜、トラとオオカミとキツネの3匹の動物がやはりまたドタバタとやってきた。

「トラ兄さん、今日は何を食べましたか」

キツネは元氣なく尋ねた。

「ああ」

トラは長いため息をついて言った。

「何も食べてない」

「オオカミ兄さんは？」

キツネはまた尋ねた。

オオカミもまたため息をついて言った。

「ああ、おれもまともなものを何も食べてない。おまえは？」

キツネは悲しそうに言った。

「俺も同じです。何も食べてない。バヤンの家から突然泉の水が湧き出して以来、おれたち兄弟は二度と美味しい太ったウシとヒツジの肉にありつけてない。毎日、外にある死んだ骨や腐った肉で飢えをしのぐほかになく、わしはもう飢え死にしそうだ！」

キツネは言い終わると立ち上がり、きょろきょろ周りを見回してにおいをかいで、お供え物を探して食べようとした。突然仏の台の後ろに人間が隠れているのを見つけて大声で呼んだ。

「トラ兄さん、オオカミ兄さん、早く来てこれは何か見てください」

このとき、トラとオオカミも肉のにおいを嗅ぎつけ、そろってとびかかり、あっという間に短を引き裂いて食べてしまった。

《原題》「長和短的故事」182-193 頁。タイピンジェラガル口述 1988 年収集整理

（3）ハーン王の贈り物

モーウス¹⁴は大昔、際限がないほど広い草原だった。花はあでやかさを競い、水と草は豊かで美しく、ウシとヒツジは群れをなし、その景色は人びとを心地よくさせる。

この魅力的な地域に、かつて勇ましくすぐれたハーン王がいた。ハーン王には3人の妻がおり、第1夫人はルリマ、第2夫人はナプチ、第3夫人はアラタンチチと言った。ハーン王がもっとも寵愛していたのはアラタンチチだった。というのは、彼女は聡明で美しいだけでなく、優しく、善良で賢かったからである。

ある日、ハーン王は大事が起こり、外地へ出ることになり、出発前に3人の妻に対して尋ねた。

「もしわたしが遠出することになったら、戻ってくる際に何でわたしも迎えてくれるかい？」

ルリマは優しく愛くるしいさまで言った。

¹⁴ 中国語で毛烏素。モンゴル語を音訳したもので、直訳すると悪い水で、清潔でない水の意（那順巴図 2002：63）。ウーシン旗を中心にオルドス地域南東部に広がるモーウス沙地（沙漠）を指すと思われる。

「ハーン王陛下、わたくしめはあなた様のために自らの手で縫った 72 の釈迦ボタンを付けた黒い緞子のチョッキで迎えます」

ナプチは手でハーン王の腕を揺らしながら言った。

「わたくしめは心を込めて縫った桃の形をした帽子がついた黄色の緞子のマントで迎えます」

アラタンチチははにかんで、もじもじしながら言った。

「わたしめは愛おしい陛下を金のような心と銀のような肌をもった息子で迎えます」

ハーン王は驚き喜び、アラタンチチの手を握りながら尋ねた。

「本当かい？」

アラタンチチはすぐに顔を首まで真っ赤にした。

ハーン王はうれしそうに夫人一人一人と別れを告げ、従者を引き連れウマに乗り、鞭を当てて出発した。

ハーン王が出発した後、ルリマとナプチは一日中服、帽子を縫うのに忙しかった。おなかが日一日と出てきたアラタンチチも生れてくる赤ちゃんのために服を縫うのに忙しかった。ルリマとナプチはとても嫉妬した。ある日、ルリマは突然ナプチに言った。

「わたしたち 2 人には子どもがない。彼女は本来寵愛を得ていて、もし子どもが生まれたら、身分がさらに高くなり、さらに寵愛を得るだろうよ」

ナプチは調子を合わせて言った。

「そうよ。どんな方法がある？」

話しながら、ルリマはうんとうなずくと、ナプチの耳に向かってしばらくひそひそ話をした。続けて 2 人はずるそうにお互いに顔を見合わせて笑った。

10 ヲ月身ごもり、ある日、すぐに分娩を迎えた。アラタンチチはおなかが痛くてがまんできず、「熱心な」ルリマとナプチは慌ただしく彼女の世話をしに来た。しばらく苦悶したのち、赤ちゃんはついに生まれた。アラタンチチは意識がはっきりしないなか、突然ルリマが驚いて叫ぶ声を聞いた。

「ああ、どうやってイヌの子を産んだのか？本当に罰作りなことだ！」

「騒がないで。妹が聞いたら傷ついてつらいだろうよ」

ナプチはもったいぶって言った。

ルリマはおくるみで包まれた子犬を抱いてアルタンチチに渡し、母乳を与えるよう促した。アルタンチチは力なく、そばのイヌの赤ちゃんを見ると、心中の悲しみをこらえきれず、声をあげて泣いた。

ルリマとナプチはお互いに顔を見合わせると、なぞめいた表情で笑った。

それ以降、アラタンチチは口数が少なくなり、一日中部屋にこもり、出てこなかった。しかし、ハーン王が帰ってくる前の晩に、彼女はこっそりと王宮を離れた。

遠出をして数ヶ月、ハーン王はようやく帰ってきた。道中、ハーン王はいつも眼前にアラタンチチ

が息子を抱きかかえて自分を迎える場面がぱっと現れていた。まさか、宮殿の門で化粧をした妖艶なルリマとナプチだけが出迎えるとは思ひもしなかった。ハーン王はウマを下りると急いで尋ねた。

「アラタンチチはどうしたのだい？」

ルリマは慌てて答えた。

「彼女ですか、イヌの赤ちゃんを産みました。合わせる顔がないと思ったのでしょうかよ！」

ナプチは他人の災いを喜ぶように言った。

「彼女はあまりに身の程知らずよ。何が、金の心と銀の肌を持つ赤ちゃんであなたさまを迎えるですって。明らかにあなたさまをからかったのよ」

ハーン王は続けて尋ねた。

「彼女は今どこにいるのだ？」

ルリマは空のはてを横目で見ながら、

「とっくに出て行ってしまいましたよ。大事な、あのイヌの赤ちゃんを抱きかかえて彼女がどこに行ったのか分かりません」

明月が夜空に浮かび、清らかな小川が月光の下で青く光り澄んでいる。天を仰ぎみ、目を細めて広野を眺め、春の日ののどかな心地と秋の寒々とした気配が次々に心に押し寄せる。ハーン王は愛しい側室の苦しみをしのぶことに心を奪われていると、知らぬ間に王宮から出て川辺に来ていた。このとき、母ウシが足をよろよろさせながら歩いてきた。後ろには中心が金で銀の花びらの模様をもつ子ウシを連れていた。ハーン王は、この2頭のウシは実に不思議だ、こんなに水と草がよいのにまだ腹がふくれず、夜中に出てきて水と草を求めるのかと思った。まさにそう考えているときに2頭のウシが目の前にやってきた。奇跡が起きた。ふと見るとその子ウシは口をひらき話しはじめた。

「あなたさまはハーン王でございますね。あなたさまに真実でしかも悲惨な物語を聞かせてあげましょう。数カ月前、あるハーン王が遠出をしました。ハーン王が出発した後、彼の愛妾が銀のように色白で美しい男の子を生みました。しかし、赤ちゃんは心が鬼のような第1夫人と第2夫人の2人にこっそりイヌの赤ちゃんを取り換えられたのです。良心がない2人はその男の子を煮て食べてしまいました。彼女たちは肉を煮た、なまぐさいスープを宮殿の外にまきました。やがて、そこに銀の枝をもつ金の花が育ち、一頭の老いたメスウシが食べました。そのあと、何年も妊娠しなかったこのメスウシはあろうことか、奇跡的に中心が金色で銀色の花びらの模様をもつ子ウシを産んだのです。このウシはウシの姿をしています、心は人間です」

ハーン王は子ウシの話を聞いて、ルリマとナプチの表情や態度を思い起こし、すべてを理解した。そこで、ハーン王は子ウシの頭をなでながら言った。

「おまえさんが話したのはすべて真実ですか」

「はい」

「それならおまえさんは物語の中で語ったあの子ウシですか」

「そうです」

「それなら、君のお母さんが今どこにいるか知っているかい？」

「知っています」

「どうしたら君を本来の姿に戻すことができるのかい？」

「西に向かって行きます。7×7、49の小河を超え、8×8、64のオボーを回ると、青い草の湿地帯に特別に美しい銀の枝をもつ金の花が咲いています。日が暮れるときにそれを摘み、急いで翌日の日の出前までに戻ってきてわたしの口の中に運びます。このようにしたらわたしは本来の姿を取り戻すことができます。しかし、よく覚えておいてください。もし花を摘んでから時間通りに急いで戻ってこれなければ、わたしは永遠にあなたさまのそばに戻れなくなります」

ハーン王は聞くと、慌てて言った。

「息子よ、わたしを待っていないさい」

走って戻り、あの銀のたてがみの駿馬を引いて出てきて、鞭を振って西にウマを飛ばすように走らせた。49の小河を超え、64のオボーを回り、最後に青い草の湿地帯の上に、やはり特別に美しい銀の枝で金の花が夕陽に輝き、きらきらと光を発しているのが見えた。ハーン王は慎重に花を摘むと、ウマの蹄を止めずに帰りを急いだ。ついに日が昇る前にまさに息絶えんとする子ウシのそばにやってきた。

ハーン王は急いで銀の枝に咲く金の花を子ウシの口の中に入れた。

「パリ、バラ」と爆発音が響くのをただ聞いただけで、子ウシの皮はすべて抜け落ち、とても生き生きとしたかわいい銀のように色白な幼い男の子に変わった。幼い男の子はハーン王を見ると急いで叩頭した。

「愚息は父王に謁見し、父王が命を救ってくれた御恩に感謝します」

ハーン王は愛おしそうに息子を抱き寄せ口づけしようとしたとき、幼い男の子は言った。

「父王、早く母を探しに行きましょう」

ハーン王は息子を抱いたまま身をひるがえしてウマに乗り、太陽が昇る方向にまっしぐらに走った。ついに水と草が肥沃な土地で放浪するアラタンチチを探し出した。

夫と側室、母子は再会し、いつとき悲しんだり喜んだりした。

ハーン王は愛する側室と息子を連れて王宮に帰った。悪行の限りを尽くしたルリナとナプチは自分に理の無いことを自覚しており、恥じて自ら王宮を出て行った。

《原題》「汗王的礼物」194-197頁。チェチェグ口述 1988年収集整理

謝辞

原著は翻訳者が 2001 年ウーシン旗でフィールド調査中に入手したものである。寄贈者に心よりお礼を申し上げる。翻訳は「中国語Ⅴ」で進めた。受講生および院生のジョナーさんと研究生の 2 人にも感謝の意を記したい。

引用文献

- A.モスタート・磯野富士子訳（1966）『オルドス口碑集：モンゴルの民間伝承』平凡社。
- ボリス・リフチン（李福清），飯倉照平編監修，荻原真子訳，石井正巳・荻原真子編（2021）『ドゥンガン（東干）の民話と伝説』（抄・試訳）東京学芸大学。
- 君島久子編訳（2001）『けものたちのないしょ話：中国民話選』岩波書店。
- 児玉香菜子訳（2016）「オルドス民話収集（1）－銭世英著、1999年、フフホト－」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』18:121-140.
- （2018）「オルドス民話収集（2）－銭世英著、1999年、フフホト－」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』20:341-361.
- （2019）「オルドス民話収集（3）－銭世英著、1999年、フフホト－」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』21:181-199.
- （2020）「オルドス民話収集（4）－銭世英著、1999年、フフホト－」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』22:389-408.
- （2021）「オルドス民話収集（5）－銭世英著、1999年、フフホト－」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』23:89-111.
- （2022）「オルドス民話収集（6）－銭世英著、1999年、フフホト－」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』24:349-376.
- （2023）「オルドス民話収集（7）－銭世英著、1999年、フフホト－」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』25:223-249.
- 荻原真子（2005）「競う花嫁・女勇者・シャマナーユーラシアの英雄叙事詩に共通するヒロイン像」吉田敦彦監修『比較神話学の鳥瞰図』大和書房, 175-204.
- （2021）「解題」ボリス・リフチン（李福清），飯倉照平編監修，荻原真子訳，石井正巳・荻原真子編『ドゥンガン（東干）の民話と伝説』（抄・試訳）東京学芸大学, 3.
- 銭世英（1999）『鄂尔多斯民间采风』内蒙古人民出版社。
- 楊海英（2024）『モンゴル帝国：草原のダイナミズムと女たち』講談社

（こだま かなこ・千葉大学人文科学研究院）

Collections of Ordos folktales (8): Qian Shiying, 1999, Huhhot

Kanako KODAMA

This text is a partial translation of "Ordos Folklore Collections" (published by Inner Mongolia People's Press, 1999). The original title is "鄂尔多斯民间采风 (Eerduosi minjian caifeng)" in Chinese, and the text is edited by Jagas (Mongolian name) who went by the pseudonym of Qian Shiying. The original manuscript was written in Chinese. This book contains eighty-six folktales collected in the Ordos district of the Inner Mongolia Autonomous Region, China, and arranged by the editor. The prominent place of the collection is probably the author's hometown of Üüshin (Wushen) Banner in the Ordos district. The folktales fall into one of three categories: about animals and plants (28), about people (34), and about myths (24). I have translated three of the folktales about myths.

The first story, "The Fortuitous Meeting of the Foolish Second Son," is about an unmarried second son who protects a small dragon from his vicious elder brother and sister-in-law; then, with the help of the small dragon, he goes to the Heavenly Palace. As the title suggests, the second son in the first folktale is characterized as foolish and not bright. Following the advice of the small dragon, the second son hides the scarf of the Dragon King's third daughter and gets together with her, as she cannot return home without the scarf. Three years later, he returns to his wife the scarf that he had hidden, and she then disappears and he searches for her. With the help of the small dragon, he visits the Dragon King's home to take her back. Overcoming various difficulties from the Dragon King with the help of the Dragon King's third daughter, he is officially recognized as married to her, becomes an official in the Heavenly Palace, and becomes the Dragon King. A similar story is "The Stag," which was collected and published by A. Mostaert. The difference between the two is that the bullying from the brother's wife is emphasized in "The Stag," whereas in the first tale, it is both the elder brother and the brother's wife. Also, a stag, instead of a small dragon, rescues the second son in "The Stag." Different from the happy ending with the Dragon King's daughter in the heavenly palace, in "The Stag," the hero lives happily with his many wives on earth after losing contact with his wife in heaven. The development of this story overlaps with "Urashima Taro," in which a rescued creature returns the favor, "Tennin-nyobo" (Celestial maiden wife), in which a man takes a maiden's scarf so she cannot return to the Heavenly Palace and so is wedded to the man, and "San-mai no O-fuda" ("The Three magic charms") a tale of escape in which a man casts a spell behind him when he runs away to fend off his pursuers. In "San-mai no O-fuda," a Yamauba (mountain witch) chased the man, but in

"The Fortuitous Meeting of the Foolish Second Son," the temple monks chased the second son because he had stolen a treasure.

In the second tale, "The Tale of Zhang and Duan," the good Zhang journeys to a new land with all his possessions and meets the wicked Duan, a beggar. Zhang and Duan become sworn brothers, but Zhang is tricked by Duan and is pushed off a cliff. Zhang survives but is blinded. A supposed celestial then guides Zhang to eavesdrop on the conversations between a tiger, wolf, and fox in a temple. Using the knowledge overheard from the conversations, he first cures the illness of a wealthy herdsman's daughter and becomes the herdsman's son-in-law. He then cures his own blindness using divine water, discovers a water source near his home, and attains happiness. On the other hand, Duan quickly uses up the wealth from Zhang and returns to being a beggar. Later, when he learns of Zhang's success, he tries to do the same, but on the contrary, the animals eat him up. Similar stories are found in the folk tale "Two Brothers" by the Dungans and "The Beasts' Secret Tale" by the Pumi people. The eavesdropping on the animals' stories and the characters' subsequent contrasting successes and failures are almost identical. The difference is that this story is based on the life of pastoralists. The water from the dug well is used as drinking water for livestock. Although they do not gain gold, silver, or treasure, they are wealthier because they no longer have to travel far to provide their livestock water to drink, and wolves and other predators no longer attack them. In addition, there are several differences in details. The story of the guidance by the celestial, the protagonist's blindness, and his recovery are missing in the two similar stories by the Dungans and Pumi people.

In the third story, "The Gift of Khan," the first and second wives kill the third wife's baby son of the most favored Khan while Khan is on an expedition, replacing the baby son she gave birth to with a newborn canine. The story is that when Khan returns from his expedition, he is reunited with his killed son who is reborn as a talking baby cow and then overcomes difficult conditions to restore his son into a human. The story's development is similar to that of the "Hanasaka Jiisan" (Flower-blooming old man).

The three stories are similar in that good deeds are rewarded, and bad people are punished. In the first story, we are impressed by the powerful and wise third princess who helps the foolish hero. This indicates the high social status of women in Mongolia and the bravery of women in heroic epics. All three stories are considered to reflect the life of Mongolian pastoralists, at least in the sense that sheep and cattle are used as metaphors for size in the first tale, and the second story is also based on the life of pastoralists. The listeners, as well as the narrator, may all be Mongols.